令和３年度 徳島県小学校教育研究会　研究主題

徳島県小学校教育研究会
事務局長　真鍋　紀子

１　研　究　主　題

自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

－主体的・対話的で深い学びを通して　学ぶ楽しさやよさを実感し
生涯にわたって学び続ける力を身に付けた子供の育成－

２　主題設定の理由

学習指導要領の前文では,「これからの学校には，教育の目的及び目標の達成を目指しつつ，一人一人の児童が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値ある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。また,「これからの時代に求められる教育を実現していくためには，よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し，それぞれの学校において，必要な学習内容をどのように学び，どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら，社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという，社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」としている。

これからの社会は，Society5.0の実現に向けて急激に変化するとともに，グローバル化も一層進展する。さらに，少子高齢化・人口減少社会の中で，社会構造や雇用環境も大きく変化するなど，先行きが不透明な時代といえる。今般の新型コロナウィルス感染症の拡がりは，私たちの予想を大きく超え，前例や慣習では対応できないことも多く，創造力を働かせることや，斬新なアイデアが求められる状況が続いている。このような社会の中で，主体性をもって生きていくためには，予測不能な社会に対応する力を付けていくという発想から，自ら変化を創り出す力を付けていくという発想への転換が必要である。

このような中にあって学校は，持続可能な社会の創造者の育成が求められ,「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力や人間性」といった三つの力をバランスよく育む教育を実現していく必要がある。自ら課題を見付け,「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら,「何ができるようになるか」という学習する子供の視点に立ち,「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程を重視し,「主体的・対話的で深い学び」による「学びの質」の改善や，指導したことが子供たちに身に付いたかを把握し，その価値を意味付ける評価の具体化に取り組んでいくことが求められているのである。

つまり，これからの教育は，学校と社会が認識を共有化し，変化が激しく未来の予測が困難な時代に向かって，価値観の違いや変化を前向きに受け止めながら，自らの力で未来を切り拓き，誰もが幸福と感じられる，ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる人間を育成する教育を実現しなければならない。これらのことを踏まえ，本年度の研究主題を，昨年度に引き続き,「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とする。

さらに，変化が激しい未来において，その変化に対応するには，学び続けることが重要である。そのためには，まず，自分が「わかった」「できた」という達成感を味わうことが大切である。また同時に，自分がみんなの役に立ったという「自己有用感」をもったり，他者の考えで自分の考えが深まったと感じたりする経験を積んでいくことにより，自分が他者との関わりの中で成長しているすばらしさを実感できるものと考える。全員が主体的に授業に参加し，一人一人が「わかった」「できた」「楽しい」「一緒に学習できてよかった」と実感できるような授業づくりを進めたい。このように，学ぶ楽しさやよさを実感しながら，確かな学力を身に付け，自信をもち，生涯にわたって学び続けることのできる子供を育成していきたい。これらのことから，今年度は，副主題を「主体的・対話的で深い学びを通して 学ぶ楽しさやよさを実感し 生涯にわたって学び続ける力を身に付けた子供の育成」と設定した。

３　研 究 の 視 点

今年度は次の４つの視点に基づいて，研究に取り組んでいきたいと考える。

⑴「主体的・対話的で深い学び」の充実

主体的な学びについては，学ぶことに興味や関心をもち，見通しをもって粘り強く取り組むことができるようにするとともに，自らの学びを振り返る場の設定も大切である。特に学習の後で「以前よりよくわかるようになった」「自分は成長した」という自覚をもたせること

が肝要である。授業を通して，自らの学習の成果を明らかにし，学習に対する意欲を高めていきたい。

対話的な学びについては，子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ，自らの考えを広げ深められているかという視点で指導のあり方を見直していく。その手立てとして，話合い，ディベート，ワークショップ，発表会等，多様な方法で他者と対話する場面を単元全体や授業の中に明確に位置付け，計画的，系統的，継続的に展開することで，自らの考えを広げ深めていきたい。

深い学びとは,習得・活用・探究という学びの過程の中で各教科等の特質に応じた「見方や考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。

これらは，学びの本質として重要な点を異なる側面からとらえたものである。単元や題材のまとまりの中で，子供たちの学びがこれらを満たし，学ぶ楽しさやよさを実感できるものになっているか，それぞれの内容と相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し，改善していくことが求められている。

(2) 社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの確立

これからの教育においては，社会に開かれた教育課程の実現が重要である。そのためには各学校において，子供の実態や地域の実情を踏まえ，学校教育目標の実現に向けて，教育課程を編成するカリキュラム・マネジメントをいかに進めるかが鍵となる。特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには，教科等横断的な学習を充実する必要があることや,「主体的・対話的で深い学び」の実現には単元などの授業のまとまりの中で，習得・活用・探究のバランスを工夫することが必要であるとされている。学校全体として教育内容や時間の適切な配分，必要な人的・物的体制の確保，実施状況に基づく改善などを通して，教育課程に基づく教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが求められている。

各学校においては，保護者や地域の声に耳を傾けながら，学校のグランドデザインを全教職員で考え,「生きる力」が求める，確かな学力，豊かな人間性，健康・体力を全教職員が理解することが重要である。そして，具体化された資質・能力が実際の授業や教育活動の中でどう育成されたかを確認し，その改善・充実の好循環が図られるようにする。さまざまな制約がある今のこの状況下だからこそ，カリキュラム・マネジメントの考えを一層大切にし，子供たちや学校，家庭，地域の置かれた状況に深く思いを巡らせ，子供たちが学び続けられるよう，可能な限りの取組を進めていきたい。

(3) 指導と評価の一体化

指導と評価は学校の教育活動の根幹である。学習指導を行い，評価して，その結果をさらに指導に生かしていくことは「指導と評価の一体化」に通じるものであり，これを組織的・計画的に行うことがカリキュラム・マネジメントの中核となる。それは，子供たちの学習改善につながると同時に，教師の指導改善にもつながる。また，一人一人に応じた指導や評価をするためには，十分な子供理解が必要である。多様な情報を生かしながら一人一人の理解に努め，それを授業改善に役立てていきたいものである。さらには，授業改善にとどまらず，子供が主体的に学び続けるためにも，教師による評価の情報を，確実に子供に返したい。子供が自ら学ぶためには，自分がこれまでどのように学び，何を学んだかという振り返りが重要となる。その際，子供が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで，子供自身が今後のめあてや学び方を考えることができるからである。教師には，子供が自ら学び続けるために，必要な力を見取り，評価することが必要となる。

(4) 教職員の資質・能力の向上

私たち教職員には，教職に対する強い情熱，教育専門職としての確かな力量，そして総合的な人間力等，実に多くの資質・能力が求められている。また，教育は時代の要請に応えるべく，その使命を担っている。目の前の子供への深い愛情を基盤に，絶えず学び続け自分を高めていくことができるような教職員でありたい。

特に，働き方改革や教職員の世代交代による教育技術の伝承等は，喫緊の課題でもある。現在，各学校や各部会で行われている研究が，教師の資質・能力の育成や学校の改善等につながっているのかを改めて問い直し，そのあり方や方法も含め見直していくことが重要である。

その意味でも本研究会が果たすべき役割は大きい。各部会がこれまで取り組んできた教育実践の蓄積や研究方法を継承しつつ，新しい時代に応じた研究を通して，教職員が互いに学び合い，学び続けることで,これまでの学校教育をさらに発展させることができる。互いの実践や意見を進んで研究会の場で出し合い，切磋琢磨することにより，優れた指導方法等を開発・共有したいものである。